



Column

「ぐぐってみれば？」

立川 雅司

知人にあることを尋ねた時の返事で「ぐぐってみれば？」と言われた。はじめはなんのことか分からなかったが、「ぐぐってみる」というのは、「インターネットの検索エンジン“google”を使って、検索してみれば？」という意味である。それほど、googleはコンピュータを使う日本人の中でも広く定着してきたといえる。

考えてみれば、私にとってもgoogleは最初に友人に教えられて以降、毎日のように使用している検索サイトであり、インターネットを使うなかで最も頻繁に使用しているサイトである。いまや研究においてもgoogleは不可欠になってしまったといえることができる。

なかでも目覚ましいのは、最近のgoogleの進化である。研究者にとっての有用さという観点から、いくつかお勧めの機能を述べてみたい。

①google scholar

(<http://scholar.google.com/>)

googleのアカデミック版というべきもので、普通のgoogleのサイトと違い、研究論文、レポート、政府刊行物などを優先的に検索するエンジンである。これまでも様々な商用のインデックス・データベースがあったが、それにまさるとも劣らないほどの情報を把握できる。特に優れているのは、ヒットした論文なりレポートが他の文献にどれほど引用されているかを示してくれることである。多数引用されているものほど、インパクトが高そうだということが分かる。残念ながらヒットする日本語文献はまだ多くない。

②google book (<http://books.google.com/>)

以前、google printと呼ばれていたもので、世界中の書籍を検索してくれる。これは世界中のすべての本を立ち読みできるようにするという発想で開発がスタートしたと聞いたことがある。検索結果で示された本については、その検索語の登場するページ、目次、インデックスなどが表示され、どのような内容の本かを概括的ながら理解することができる。当初は、大きな図書館の蔵書をすべて電子化するプロジェクトも計画されていたというが、反対などもあり、その後の進展は紆余曲折があるようだ。なお、このサイトからは、Amazon.comなどにもリンクされている。

③google video (<http://video.google.com/>)

googleは、pdfやdocなどの特定のファイル形式、あるいはイメージ・ファイルなど、ファイルの形式を指定して検索してくれる機能を有するが、最近は映像ファイルを検索してくれるサービスも始めた。研究者の観点から言えば、研究テーマに関連した講演会や、政治家（名前で検索すればよい）の演説などが検索できる。いずれも数分から数十分にわたるもので、ちょっとしたテレビ講座のような感じで聞くことができる。語学の勉強にもよいと思われる。ただし、具体的な内容は聞いてみなければ分からず、検索でヒットしたからといってその中身が求めているものかどうかは分からない。

このようにgoogleは進化し続け、インターネットのインフラになりつつある。そしてこうした新たな機能は、研究者にとっても非常に有用なものも多い。これは検索エンジンが優れていると共に、検索された結果に客観性や信頼性が確保されている（バイアスがかかっていない）という前提があるからこそ、リサーチする側も積極的に利用することになっているものと考えられる。最近google自体を取り上げた本も刊行されているが、なかにはこうした点に批判的な意見も散見される。こうした点への留意も、ユーザーとしては頭の片隅においておく必要がある。ただ言えることは、最終的には情報を見る側の「目利き」がいっそう重要になっているということである。